

『田辺聖子十八歳の日の記録』から見た樟蔭女子専門学校：漢文への関心と大江文城先生を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4905

『田辺聖子 十八歳の日の記録』から見た

樟蔭女子専門学校

— 漢文への関心と大江文城先生を中心に —

白 川 哲 郎

はじめに

二〇二一（令和三）年六月、田辺聖子氏の十八歳頃の日記が再発見されたというニュースが、マスコミを賑わせたことは未だ記憶に新しい。二〇一九（平成三二）年六月九十一歳で亡くなられた田辺氏は、芥川賞はじめさまざまな文学賞を受賞し、二〇〇八（平成二〇）年にはその文学上の功績から文化勲章を受章されるなど、数多くの小説・エッセイ・評伝等を著され、まさに「戦後」日本を代表する作家の一人である。そうした著名な作家の、そして作家となる以前十八歳頃の若き日の日記であるという点に、注目が集まったのである。

しかも田辺氏のこの日記は、「昭和二〇年八月十五日」という日

本の近現代史上の画期となる第二次世界大戦「敗戦の日」を挟む時期を対象としていたことから、高等教育機関に学ぶ十代後半の若者、さらには言えば当時「銃後」を担わされた若き女性が、その日を境に戦中から戦後へと大きく転換する社会の変化をどのように受けとめていたのか、といった観点からも注目される日記の再発見であった。さらにその記主が、先に述べたように、後に「時代」を代表する著名な作家となったという点からしても、かかる人物が若かりし頃巨大な時代と社会の転換をどのように見つめていたのかをうかがい知る上で、たいへん興味深い日記の再発見であったのである。このように田辺氏の日記の再発見は、実にさまざまな角度から注目を集める出来事であった。

その後田辺氏の日記は、文藝春秋社より『田辺聖子 十八歳の日の記録』（以下、『十八歳の日の記録』と略記する）として出版さ

れた。^③ その出版によって、田辺氏の日記への接近が容易となったことは、たいへん喜ばしいことであった。

翌二〇二二(令和四)年になっても、田辺氏の日記への注目は続いた。毎年八月になると、いわゆる「終戦の日」特集を組むメディアから注目されたのである。その代表は、同年八月十五日夜NHKで放送されたドラマ「セイコグラム」であろう。このドラマは、田辺氏の日記を基に現代的な手法と感覚で、十代後半に自らが体験した戦争、そして敗戦を田辺氏がどのように見つめていたのか、感じていたのかについて描こうとしていた。また、大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館(以下、「田辺文学館」と略記する)でも開館十五周年記念展示第三弾として、同年一〇月二四日から十一月二一日の会期で「第十四回特別企画展 田辺聖子の青春」が開催された。田辺氏の日記の直筆資料が展示された他、関連資料が展示され、注目を集めた。日記からうかがい知られる田辺氏の貴重な生の証言が、人びとの興味を引くであろう。

このように幾重にも注目を集めた田辺氏の日記が、後の田辺氏のいくつかの作品の基礎となっていることは、梯久美子氏による「解説」に指摘されている。^④ 文学史的には、再発見された日記と田辺氏の著作との関係の詳細な分析が、今後深められて行くことになるのである。^⑤ 田辺氏の日記の再発見が、田辺文学研究の上で大きな意義を有することは疑いない。

後に著名な作家となる若き女性が第二次世界大戦敗戦前後について記した貴重な記録として、また、昭和を代表する作家田辺氏の作

品を研究する素材として、この日記を読み解いていくことは、おそらくその分析方法として最も正当なアプローチであろう。その点を十分に承知した上で、『十八歳の日の記録』としてまとめられた日記とその日記中に遺されていた未発表作品とを歴史史料として見た場合、そうした文学史的なアプローチとは別に、日記やそれら作品を執筆した時期、田辺氏が在籍していた樟蔭女子専門学校(以下、「樟蔭女専」と略記する)の姿を明らかにして行く上で極めて貴重な史料となる。『十八歳の日の記録』を分析することで明らかとなってくる事実は、「昭和二〇年八月十五日」という時代の転換点を挟む時期の日本の女子高等教育機関における教育の実態を追究する上でも貴重な材料を提供してくれるのである。そこで以下本稿では、『十八歳の日の記録』を歴史史料として読み解く立場から、その記述を手がかりに、当時の樟蔭女専における教育の実態への接近を試みてみたい。

一 田辺聖子、「漢文」への関心

筆者は、かつて樟蔭学園に残る樟蔭女専の一九四四(昭和一九)年度の『教務日誌』を検討することで、当時の樟蔭女専の状況の一端を明らかにした。そこでは、昭和一九年度における学校生活に関して、①勤労働員、②繰り上げ卒業、③空襲の脅威という三点に注目した。^⑥ ちなみに「昭和一九年」度は、田辺氏が樟蔭女専に入学された年度である。『十八歳の日の記録』は、昭和二〇年四月一日か

ら書き始められており、^⑦残念ながら昭和一九年度に関する記述は無い。しかしながら、その冒頭から郡是塚口工場における勤労働員、しかも寮生活をしながらの勤労働員の実態について、たいへん詳細に記述されている。^⑧とりわけ国語科(当時「国文科」は「国語科」に名称変更されていた)生徒間の人間関係や動員された工場の女子工員に対する微妙な心情などが、日記という性格もあってかたいへん生々しく記述されている。それらが手がかりに当時の勤労働員の実態について追及することも興味深い、本稿ではいったんそれは棚上げにして、『十八歳の日の記録』のそここに散見する田辺氏の学問への関心をうかがわせる記述に焦点をあてたい。

『十八歳の日の記録』を読み進める中で気がついたのは、当時の田辺氏の『漢文』への関心の高さである。昭和二〇年九月九日条には、「私は漢文をもっと究めたく思っている。行ければ論語、孟子、史記、左伝、魏志なんか見たいし。」と記される。さらに昭和二一年になってからの記事となるが、二月十四日の学期末試験に関連する記述の中に「今もっぱら力を入れているのは、漢文である。しかし重大と思っているのは、教育と倫理、これが心配。」といった記事もある。そして同年四月に三年次に進級した後も、七月十七日条には「勉強はいま、漢文に手をつけているが、膨大で難解な荘子、全部を克服するには、骨が折れる。」と記され、八月十六日の記事にも、成績のさらなる向上を目指して果たすべき課題として「それと、老子と論語、これもやるべきだ。荘子の予習。」と記されている。さらに付け加えるならば、昭和二一年末の冬季講習においては、

関矢道雄先生の「支那文学史、詩について」を、安田章生先生の「短歌の周辺」とともに選択している。^⑨

ところで先に引用したように、二年次の期末試験で力を注いだにもかかわらず、期待したようには漢文の成績が良くなかったことから、漢文の担当教員、おそらくは関矢先生に点数について問い合わせしようかどうか迷う様子が、昭和二年四月二十五日条に次のように綴られている。

(前略)

大掃除終了後、(中略)成績をきいた。勝俣先生からである。漢文の八十七点は心外中の心外であった。宇賀田さんでも九十点台であるのに、何故私は八十七点なのであろう。成績査定会を開いて定めた結果であろうけれど、後々のこともあり、三年生の試験に際して、心得ねばならぬから、ぜひ説明してもらおうと思う。心の中がもやもやして今にも泣き出しそうで、漢文がにくらしくってならない。

「人を馬鹿にしてるわ」と思わず大声で言ったのが教務室の前であって、後でハッとなった。だけど、ほんとになぜこんなクサリ切った点なのか、聞きたく思う。私は、試験は出来た自信がある。また、月々の宿題もちゃんと出してきた。その宿題も、天地に恥じず自分が、一生懸命考えたことはたしかである。私はこう言おうかと思う。「先生、あのう・・・前学期の漢文の成績ですが、率直に申しあげますと、意外なほどの点でしたので、どういうところがいけなかったのか、これからの参考の

ために、聞かせて頂けませんか」

いや、その前に、まず切り出さねばならない。あの先生のいつも居られる図書室は、事務員が二、三人とぐるを巻いてるから、とつぜん、こう切り出してはならない。まず、昼食後、おずおずとドアを開け、しおらしい恰好をして、入ってゆく。そして、ゆっくりと、よく理解出来るように言う。

「先生、お願いがあります・・・」

きっと、先生は近眼鏡越しに、私をしげしげと見られるだろう。私はきっと真赤になって俯むくに違いない。

昼休みの時間だったら、あたりに沢山、生徒がいるだろうから、それではやはり、放課後にしようか。放課後では先生は用事を控えて居られるだろうから、こう言う。

「先生、お忙しくありませんでしょうか。ちょっとお願いがあります・・・」

これでよろしい。しかし先生は、きっと大きな声を張り上げ、「はあっ!!? なんですかあ?」

と言われるだろう。先生は師範在学時代、右耳を手術して全く聞えないのである。大声でいわれたら私は逆上してしまって喉はカラカラになり、目はひからび、声はかすれ、顔面の筋肉はこわばって泣きたくなる。私はとっても気が小さくて、羞み屋だから。胸を張って堂々と冷静に・・・。

ああああ。いやあんなつまう。でも八十七点という点に思いを致す時、のほほんと拱手傍観してはいられない。

(後略)

長い引用となったが、後に時代を代表とする作家となった田辺氏の面目躍如、学校を舞台にした小説を読むかのような感覚さえ呼びさます記述である。それはともかく、注目したいのは、二年次末の試験に基づく漢文の成績に対する不満と自身の漢文の学びに対する自信である。日頃から漢文を十分に勉強し、しかも試験についてもかなりな手応えを持っていたにもかかわらず、納得できるような成績評価がなされなかったというのである。改めて、田辺氏が樟蔭女専在学中、漢文に対して相当な興味とそれを学ぶことに力を注いでいた事実を確認したい。

先の引用で読み取れる田辺氏の成績問い合わせへの逡巡は、意外とあっけなく解消している。翌四月二十六日条によれば、「放課後、漢文の先生に思い切って言う。疎開になった寮へ行く途中の廊下で、幸い誰もいず、思う存分話せた。先生は、親切に、さっそく調べましょう、それはそうです、あなたが九十点以下とはおかしい。私も神様じゃないからネ、間違いもあるかもしれん・・・。『こんなこと申しあげたら、先生は自惚れていると思われるかもしれませんが』『いやなに、はあ、そんなことはちっとも。もちろんそうです、後々のために、自分の疑問を解くのはよいことです。よろしい。試験の答案がないとわからんから、ではさっそく・・・』とある。この後、担当の先生からどのような回答があったのかは不明であるが、田辺氏の問い合わせに対する先生の対応は、丁寧かつ田辺氏の漢文^①に対する自信を満たすものであったと考えてよいであろう。

それではなぜこのように、田辺氏は漢文に興味を抱き、その学習に力を注いでいたのであろうか。もちろん一つには、成績の席次をあげる目的があったことが推測される。漢文の成績をあげることで学科内における成績順位があがることを望んでいたのであろう。ただ、そうした成績向上への欲求からのみ、漢文に注力した訳では無かったと推測できる。次にそれらの点に触れよう。

漢文の学習に意欲的に取り組んだ理由として、まず一つ、田辺氏の中国の歴史や中国大陸に関する高い関心を指摘することができるであろう。

例えば田辺氏は、樟蔭女専在学中一年次から二年次に進級する時期、「エスガイの子」を完成させている。「エスガイの子」の内容に言及した昭和二〇年四月九日条によれば、主人公となる「エスガイの子」とはテムジン、すなわち元の初代皇帝チンギスハンのことである。当然、その舞台となったのは中国大陸である。また、『十八歳の日の記録』の途中で記されていた「蒙古高原の少女」という短編も中国大陸を舞台としている。さらに言えば昭和二年四月までの間に田辺氏は、中国を舞台とする「北京の秋の物語」「春愁蒙古史」といった作品を完成させていたことも知られる。とするならば、当時の田辺氏が、中国の歴史や中国大陸についてひときるかたならぬ関心を持っていたことが推測される。そして、昭和二〇年五月二十三日条の「東洋史をやっている。面白くてやめられない。藤田元春の参考書をやっているのであるが、あれも憶えたい、これも知りたい、どうしてこうなるんだらう、などと考えて行くと、面白くて私は齒

医者へ行って順番を待つ時間も惜しくて、おぼえずにはいられない。」という記述は、その推測を補強してくれよう。樟蔭女専在学中、田辺氏は、中国の歴史や中国大陸について強い関心を有しており、その延長線上に漢文への高い学習意欲が生み出されたのではないだろうか。

さらにもう一つ、田辺氏が漢文への関心を強くしていた理由を推測しておきたい。それは、田辺氏が漢文を単なる学習の対象としてのみ見ていなかったと考えられることである。『十八歳の日の記録』に、次のような一節がある。

漢文の先生はあんなに熱心に授業して下さいなのに、どうして皆は男のヒステリーだの、にくらしい先生だの言うのであろう。私は良い先生が来て下さったと感謝している。次々とプリントを刷って下さるのである。私は自分の努力を他人に誉められたくないのに、宇賀田さんは私の糟粕を誉めて足れりとしている。どうしてあの人は、自分の修養になることに目を向けないのであろう。そんなことをしていたら、自分自身の実力なんてつきはしないのに。

ここで述べられているのは、先に漢文の成績の問い合わせをした関矢先生についての評、そしてある級友への評となるが、注目したいのは傍線を付した箇所である。田辺氏は、漢文で学ぶさまざまな作品が「修養」の素材、自分自身を高めて行く上での教え、導きになると考えていたことを推測させるのである。実際、田辺氏は次のようにも述べている。

漢文で浩然の気を習った。まだはつきりしない。しかし面白い。論語の方が孟子より面白いと思うが、孟子の王道政治の理想は、民主主義の今日でも共通する倫理を含んでいる。しかし理想はあくまで理想だ。孟子の夢は、違った形をとって、いつの世にも人類の上に輝いている。充実した生活を——そののみを願う。(後略)

孟子の「浩然の気」について学んだことを契機として、自身が経験しつつある戦後日本で始まったばかりの民主主義について思考を巡らせている。単に孟子の説を理解するだけでなく、それを自らの経験に即して考えを巡らせるという、たいへん深い学びが田辺氏の内面においてなされていると推測される。敗戦という時代の大きな転換を実体験しているが故のことであるかもしれないが、漢文を紹介しての学びは、その後の田辺氏の考え方に大きな影響を残したのではないだろうか。^⑩

以上、田辺氏の『十八歳の日の記録』について、「漢文」への関心という視点から検討してきたが、この田辺氏の「漢文」への関心という点に関連して、興味深い資料が田辺文学館に所蔵されている。次に章を改め、その資料を紹介して行きたい。

二 田辺聖子のノート「日本著名漢詩集 文學史研究論文(附) その一」

紹介する資料は、大学ノートの表紙を模様のある紙で覆い、「日

表1 「日本著名漢詩集／文學史研究論文(附)その一」目次

No.	項目	執筆(講義)者	ノート ページ	備考 / 検討
1	「更科日記について」	田辺聖子	1	田辺氏の論文か？
2	文學史雑記	新町(徳之)教授	11	
3	「和珥坂の少女」	森本治吉博士	16	紫式部学会編『日本の教養 むらさき』第7巻第11号(1940年)所収論文を書き写したもの。 「上古の女性」作成のために参考論文としたものか？
4	十八史略詳解	大江(文城)教授講義	25	昭和19年度の講義ノート
5	漢字説文學	大江(文城)教授講義	31	昭和19年度の講義ノート
6	日本著名漢詩集	大江(文城)教授講義	32	昭和19年度の講義ノート

注「ノートページ」欄は、表表紙裏の「目次」に()書きで記されている。この数字は、ノートを見開きにした際、下側に位置するページの右下隅に赤字で書き込まれた数字と対応する。田辺氏が参照の便宜を図るために記載したものであろう。

本著名漢詩集 文學史研究論文(附) その一」という題簽が付された、樟蔭女專時代の田辺氏のノート(以下、「漢詩集ノート」と略記する)である。この漢詩集ノートは、「はじめに」でも触れた「第十四回特別企画展 田辺聖子の青春」においても展示されていた。表紙に貼られた題簽の下には、「樟蔭女專 國一 田邊聖子」という所屬と学年、氏名を記した貼り紙もあり、昭和一九年度、樟蔭女專一年次の田辺氏の学びの足跡であることが判る。特別展のチラシによれば、「空襲によって自宅が焼失したなかで奇跡的に残されたノート」ということである。筆者は、樟蔭学園一〇〇周年記念誌の編纂に携わる中でこの漢詩集ノートの存在を知り、今回改めてその写真版を閲覽して、その内容を検討する機会を得た。以下ここでは、写真版から知られた情報を中心に紹介、検討する。

漢詩集ノートの表表紙を開くと、その裏には田辺氏自身がこのノートの目次を記している。その目次を表1として示す。表1からは、この漢詩集ノートに記録されている内容が一覧できる。順に見て行くことにしよう。

(1) 「更科日記について」と「文學史雜記」

No.1「更科日記について」は、田辺氏自身を書いたものとのことであるから、おそらくは樟蔭女專一年次に、何らかの講義の課題として、『更級日記』について考察、執筆して提出した、いわゆるレポート・論文と推測できる。ノートにして一〇ページを超える分量を有し、相当な力作である。その点からすれば、この漢詩集ノート

の題簽に「文學史研究論文」と記す「研究論文」の下書きにあたるのが、この「更科日記について」と見なしてよいかもしれない。

右の推測がもし許されるのならば、課題が出された科目は「文學史」ということになろう。そして「文學史」の講義において、平安期の物語作品が取り上げられていたことを推定させる。実際、昭和三(一九二八)年樟蔭女專開校直後の『教授要目』には、国文科一年次には「近古文ヲ主トシ平易ナル中古文ヲモ併セ授ク」とあり、教科書に使用する作品として『徒然草』などの「近古文」のほかに、『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大鏡』などがあげられている。これらは講読の対象と考えられるが、同じ一年次で講義された「文學史」でもそうした「中古文」「近古文」が取り上げられたと推測することはそれほど無理がないであろう。したがって、一年次に田辺氏が履修した「文學史」の課題として、この「更科日記について」が提出された可能性は高いのではないだろうか。

さて、この「更科日記について」に関連して注目したいのは、『十八歳の日の記録』昭和二〇年九月四日条である。

いま更級日記を小説化して、その現実と夢の交錯の美しい姿と、将来への希望に、常に燃えている、作者の生活意欲の逞しさを描こうと思う。私はいま前途になんらの光明もなきさうなので、光明に燃え希望の灯をあかるく掲げつつ、現実の厳しい茨を微笑して切り拓いてゆこうとする更級日記の作者の姿に傾倒している。図書よりその参考書二冊を借り来たり、毎晩勉強のあとで調べて今のところ構想を練っている。冒頭を、京の家

のはじまりからもってこようと思うがいかが？（後略）

敗戦後九月になって、樟蔭女専での授業も再開され、戦時下の勤労動員や空襲の恐怖から解放された時期に二年生となっていた田辺氏は、『更級日記』の小説化を構想していたのである。そうした『更級日記』への興味、関心は、高等女学校時代からのものであったが、それを発展させて小説化を期する契機となったのが、先の論文作成であったのかも知れない。かかる点についての検討は今後の課題であるが、ここではひとまず単純に、田辺氏が樟蔭女専在学中に執筆した論文が残されている幸運を喜びたいと思う。

次のNo.2「文学史雑記」と題された部分は、目次によれば、樟蔭女専で「文学概論」などを担当されていた新町徳之先生の講義を記録したものである。

先の『更級日記』に関するレポートに続く部分には、目次には登場しない漢文の読み方についてのメモ的記述を挟んで、「四月十三日（木）」との日付記載があり、一一ページとなる。昭和一九年四月十三日は木曜日であるから、日付以下のこの「文学史雑記」と題された部分は、四月十三日の授業内容を記録したものとみなすことができる。この部分では、当時活躍していた作家たち、特に関西圏で活動していた作家たちの名前が記されている。多くの作家たちの名前があげられる中で、吉川則比古、下村海南（弘）、岸本水府、大谷句佛、水落露石、五島美代子、五島茂、九條武子、柳原白蓮、高木月計、菊地幽芳、横山健堂（達三）、吉岡善寺洞、内藤鳴雪（素行）、星野立子らに赤鉛筆で線が付されている。正宗白鳥や徳田

秋声、川端康成、横光利一、佐藤春夫らの名前も見いだされるが、彼らに赤線は付されていない。赤線が付された時期を確定することはもちろんできないが、どのような興味、関心から田辺氏がわざわざ赤線を付したのか、興味は尽きない。

ところで、田辺氏が樟蔭女専に入学した昭和一九年度は、四月五日午後に入學式が行われている。したがって先の日付記載にある四月十三日は、一年生にとっては本格的な講義が開始されて間もない頃であり、「文学史雑記」は、その頃聴講した授業のノートであったと判断してよいであろう。新町先生の授業を樟蔭女専に入学してすぐの田辺氏が懸命にノートしている様子が想像される。

そして同時に、私たちはこの田辺氏が記録した内容から、当時の樟蔭女専における国語、田辺氏が付した「文学史雑記」との題名からすれば、おそらくはまた「文学史」の講義の一端を推測することが許されよう。もちろん「文学史」の講義では、先に触れたように、『更級日記』のような古典文学がとりあげられていたであろう。ただ、そうした古典文学にとどまらず、当時このノートが記された時点では、「現代」にあたるが、大阪はじめ関西圏で活躍する作家たちが取り上げられた授業が講じられていたことが注目される。かつて筆者は、樟蔭女専における「文学史」試験問題の出題傾向が、昭和六（一九三二）年度頃を境として、近代文学重視へと変化していたことを指摘したことがある。卒業試験の意味をも有した中等教員検定試験問題の出題傾向からそれを推定したのであるが、樟蔭女専では三年次段階にとどまらず一年次から近代文学、さらに言えば

『現代文学』と呼んでも差し支えないような時期の作家を取り上げた授業が行われていたことが知られるのである。昭和一九年という、戦争の敗色が次第に濃厚となり、十分な授業時間が確保されたとは到底考えられない時期であり、系統だった講義の実施も困難であつたろうことは想像に難くない。したがって、一回限りの授業であつた可能性も否定できないが、同時代的な作家や作品が取り上げられた授業は、受講生からすれば興味をかき立てられるものであつたではないだろうか。

(2) 森本治吉「和珥坂の少女」

No.3 「和珥坂の少女」は、紫式部学会編輯の雑誌『日本的教養むらさき』第七卷第十一号（昭和一五（一九四〇）年十一月一日発行）に掲載された森本治吉氏の論文「和珥坂の少女―上代女流作家評論―」のほぼ全文を田辺氏が筆写したものである。この「和珥坂の少女」では、崇神天皇の時代、北陸に派遣された大彦命が山城國和珥坂で出会った少女が大彦命に向かって歌った歌から説き起こし、古代、とりわけ「上古」と区分される時期の女性に指摘できる、①シャーマニズム的な側面と②軍事にも関わっていた側面が論じられている。そして漢詩集ノートのこの部分には、「日本女性史参考」と赤字の頭注が田辺氏により付されている。

ここで想起したいのが、『十八歳の日の記録』昭和二〇年五月二十一日条である。「千葉先生に出した論文「上古の女性」は秀をつけて返してもらい、評に「再読したが出色の出来栄である」とし

てあって嬉しい。（中略）この論文については私はほとんど絶望していたのに、こんな程度の方が秀とは恐れ入る。優がほとんどらしい。（後略）」とあり、田辺氏が一年次の課題として「上古の女性」と題する論文を提出していたことが判る。田辺氏のこの「上古の女性」なる論文は、残念ながら六月の大阪大空襲によって焼失してしまったことが知られるが、森本「和珥坂の少女」で論じられていたような、上古の女性に関するシャーマニズムの側面や軍事に関する側面について触れた論文であつたことを推測することが許されるかもしれない。先の「更科日記について」にしても、この「上古の女性」にしても、田辺氏が課題として提出した論文は、極めて高い水準にあつたと言つて良いであらう。

(3) 大江文城教授講義三編

森本治吉「和珥坂の少女」に続いて、漢詩集ノート二四ページの文学史に関わると推定される記載を³³はさみ、その次に綴られているのは、大江文城（おおえ ふみき）先生による講義のノート「十八史略詳解」「漢字説文學」「日本著名漢詩集」の三編である。

No.4 「十八史略詳解」は、行頭に「p34」のようにページ数が記されている。その下に長文の『十八史略』の解釈と判断される文章が記されている。田辺氏が予習、あるいは復習の際に教科書の原文について解釈したものと推定できる。それが六ページ半ほど続いた後、赤字の「日本著名漢詩集及ビ漢字説文學講義」との頭注が記される。

ただ、「漢字説文學講義」、目次のNo.5「漢字説文學」に該当する

部分は、わずか半ページに満たない。縦書きされたノートの上部に、カタカナ書きの五十音図が記され、そのうち「ア」字の上に「音」の字、同じく「ア」字の右横に「韻」の字がメモされている。そして五十音図の下には「五十音圖は、悉曇―印度―の字に通じてゐる人が作ったのであらう。吉備真備といふのは嘘である。これはまた、支那の説文学にも要る。支那にアイウエオはないけれど、韻はこれをふむ。」と記載されるのみである。分量的にはきわめて少ないが、わざわざ目次に抽出していることを考えれば、田辺氏にとっては大事な内容であったのであらう。前章で指摘した、漢文への関心と関連するのかもしれない。

最後のNo.6「日本著名漢詩集」は、この漢詩集ノートの題簽においてメインの題名としてそれが採用されていることから推測されるように、田辺氏にとって最も大事な部分であったと考えられる。ここでは、平安時代、菅原道真の「九月十日」と題する七言絶句に始まり、江戸時代後期、梁川星巖の「芳（吉）野」と題する七言絶句まで、全部で三十五の日本人による漢詩について、返り点を付した原文と解釈を記している。途中とところどころ追加の記述を行った貼り紙もあり、この「日本著名漢詩集」の部分を何度も田辺氏が見直していたであろうことも推測される。やはり田辺氏にとってはこのノートの中でとりわけ大切な箇所であったことは間違いないであろう。

さて、この漢詩集ノートに挟み込んであった別紙の一覧を基に、この部分に取り上げられている漢詩を表2としてまとめた。

取り上げられた漢詩のほとんどが七言絶句であること、そして表2のNo.10石川丈山以降、その三分の二以上が江戸時代の文人らの手になる漢詩―No.8・9の伊達政宗も生存年から考えると、それに含めるとよいのかもしれない―であるといった点を看取することができる。こうした内容の講義を漢文担当の大江先生が行っていたことをここでは強調しておきたい。ふつう漢文と言えば、中国古典を素材にして講義されることが当たり前のように感じるが、昭和十九年当時樟蔭女専では、日本人が作った漢詩、しかも江戸時代のそれについても授業で講義されていたのである。そしてその内容を記したノートを大切にしていたことからすれば、やはり田辺氏は、樟蔭女専在学中、日本で作られた漢文も含めて、漢文に対するひとかたならぬ関心を有していたと考えて良いであらう。

なお、漢詩集ノートは、この「日本著名漢詩集」部分で実は終わりではない。五八ページ以降には、裏表紙側から三ページにわたって、赤字で「をかし」と「あはれ」についての考察と注記された内容が記されている。目次に取り上げられていないことから、想像するしかないが、この部分も田辺氏が何らかの講義の課題として作成しつつあったレポート・論文の下書きではないだろうか。ただ、①未完に終わった、あるいは提出に至らなかったことから、あえて目次には記さなかった。あるいは、②題簽を付したり、目次を作成した後、ノートの余っていた部分を使って下書きをしたため、目次には現れてこなかった。目次に記されていないのは、①②のいずれか、あるいは③として、①②の合わさったことによるかと想定して

表2 「日本著名漢詩集」記載漢詩一覽 大江文城教授 講義

No.	題 名	作 詩 者
1	九月十日	菅公 (菅原道真)
2	示虜	釈 祖元 (無学祖元)
3	海南行	細川頼之
4	避乱泛舟江州湖上	足利義昭
5	九月十三夜	上杉謙信
6	偶作	武田信玄
7	新正口号	武田信玄
8	欲征南蠻有作	伊達政宗
9	朝鮮之役載梅而歸云々 (栽之後園詩以記)	伊達政宗
10	富士山	石川丈山
11	寄題豊公旧宅	物 徂徠 (荻生徂徠)
12	還館口号	物 徂徠 (荻生徂徠)
13	祝	伊藤仁斎
14	過藤樹書院	伊藤東涯
15	夜下墨水	服部南郭
16	月夜三叉口泛舟	高野蘭亭
17	送子和之參州	山県周南
18	稻叢懷古	太宰春台
19	赤馬関	藪孤山
20	夢親	細井平洲
21	鹿児島客中ノ作	亀井南溟
22	漫作	蒲生君平
23	東坂赤壁図	市川寛斎
24	宿生田	菅茶山
25	冬夜ノ読書	菅茶山
26	先妣十七回忌	
27	月夜歩禁垣外	柴野栗山
28	牛瀑観楓	釈 大典
29	太公望垂釣図	佐藤一斎
30	漫言	佐藤一斎
31	木母寺	柏木如亭
32	詠史	河野鉄兜
33	芳野	河野鉄兜
34	芳野	頼杏坪
35	芳野	梁川星巖

おきたい。³⁸⁾

(4) 大江文城先生と小説「無題」

最後に、「十八史略詳解」「漢字說文學」「日本著名漢詩集」の講義者である大江文城先生に注目したい。大江先生は、漢文の担当者として昭和一〇(一九三五)年度から昭和二〇(一九四五)年度(途中)まで樟蔭女専で教壇に立たれていたことが確認される。そして『十八歳の日の記録』昭和二〇年四月十八日条には、次のように記されている。

漢文不得手、然共懐旧情激然。吾時比拙文一章草、聯綿而想起、彼漢文担任教授大江先生之禿頭。先生口癖曰、

途保途保亦

或又、月光照燦評曰

巴亦

或又、獨坐、状曰

津久念亦

先生、無禿名。恐為人格之円満歟。吾思、円満居士。先生有御健勝、祈御息災。

日記であるとの安心感からか田辺氏は、大江先生の風貌に言及する一方で、大江先生に禿名がないことを取り上げ、それは先生の人格が円満であるからではないかと述べ、その健康を祈っている。漢文として記事を書いているのはご愛敬かもしれないが、大江先生を敬愛する気持ちを読み取ることができよう。



大江文城先生
『樟蔭女子専門学校 卒業アルバム』
(1936年)より

そしてさらに注目したいのが、『十八歳の日の記録』昭和二〇年十二月二十三日条と翌二年一月十一日条の間に載せられていたという女子専門学校を舞台とした小説(「無題」³⁹⁾)の構想、登場人物たちの性格付けを記した、昭和二〇年九月二十二日条の「老齢で物々しく威厳があり、しかも優しい漢文のO教授。」なる記載である。漢文担当でインシヤルがOということになれば、そのモデルが大江先生であったと推測することは容易である。⁴⁰⁾この漢文担当の老教授の授業時の様子が小説「無題」の中では、次のように描かれる。

① ゆったりと老齢の教授が現れる。

② 敬は一心にノートをした。教授の解釈はつねに新しい時代に沿って、生命を持っていた。教授はゆっくりと低い声で言う。やさしく、そして真摯に教授は生徒たちに言う。長年の教授

生活で、口調に一種の型ができ、その型は各々の教授の性格を表す。

③教授は老齢で疲れるので椅子へ座り、片手に教科書を持ち、片手はかるく机に添えている。極めてゆるゆると、教授は味のある、老いた声でしずかに言う。敬は、孔子の肉声をきくような錯覚に捉われ、ふと微笑して教授を見上げた。教授もまた、ふと敬を見下し、優しく頷く。

④教授は老いたるやさしい瞳をひろく和やかに、生徒たちに投げかける。敬は「忠恕」という言葉がどう解釈していいかわからない。と、教授はそれに答えるごとく、嘯みふくめるように説き出す。

⑤敬はクラスの人々が、漢文の時間と道義の時間を截然と区別している理由が汲めないのであった。敬にとっては、自己を修養する道は一つだと思う。彼女は、自己の人格を磨くのは、やぶさかでなくありたかった。(中略)敬はあらゆるものを吸収して自己を完成して行きたかった。試験に備えるためのみの学問ではないと敬は確信し、そういう自覚を持つことがすでに修養道の一步を印したように嬉しい。

⑥教授はまた、おもむろに教科書を取り上げて、読みはじめる。六箇所ほど抽出したが、②④や⑥の漢文担当教授の授業の描写は、大江先生の日頃の授業の様子を下敷きしているのではないかと想像する。そして⑤の叙述は、前章で指摘したように、田辺氏の漢文への関心が単に教科としての漢文、成績を上昇させるためだけ

であったのではなく、漢文を学ぶこと(もちろん漢文だけではなく、学問全てであろうが、漢文にその傾向がより強いということである)が、自己の人格の完成、修養に役立つとの認識を、田辺氏が有していたことを裏付けるものでもあろう。

このように見てくると田辺氏の漢文への関心の高さは、一年次に敬愛できる大江先生から授業を受けたことにより、よりいっそう強まったのかもしれない。その大江先生が亡くなられたことを、田辺氏は『十八歳の日の記録』昭和二〇年十月十九日条に、「大江先生はお亡くなりました。惜しい。ほんとに悲しいことだ。」と記す。田辺氏の本心からの言葉であつたらう。

おわりにかえて

以上、『十八歳の日の記録』からうかがい知られる田辺氏の「漢文」への関心と、それに関連する田辺氏のノート「日本著名漢詩集 文學史研究論文(附) その一」の内容を紹介、検討してきた。

田辺氏が学中の樟蔭女専について検討を深めることを目指して分析を進めてきたが、なにぶん田辺文学については不勉強のため、的外れ、あるいは言わずもがなの指摘に終始したのではないかと恐れる。ただ、当時、樟蔭女専において行われていた漢文教育の一端は明らかにできたのではないかと考える。

ところで、これまで樟蔭では一般的に昭和二〇年の敗戦直後、比較的早い段階で学校が再開されたと言われてきたが、田辺氏の記述

から、八月十七日に生徒がいったん学校に集められ伊賀駒吉郎校長から訓話があったこと、そして九月一日から授業が再開されたことなどが確認される。また、伊賀校長が亡くなられた際の樟蔭女専らびに樟蔭高等女学校の雰囲気もうかがい知ることができる。『十八歳の日の記録』は、田辺氏が在学した時期の樟蔭女専の実態を明らかにする上で、極めて貴重な史料なのである。

さらに付け加えるならば、既に触れたように、あわせて公開された女子専門学校を舞台とした小説「無題」も田辺氏の樟蔭女専における経験を下敷きにして執筆されたものであることは疑いないであろう。したがって、この小説「無題」もあわせ検討を深めることで、敗戦前後の時期の樟蔭女専の実態をより具体的に明らかにすることができるであろうことを指摘して、本稿を閉じることにしたい。

注

- (1) 『文藝春秋』二〇二二年七月号。
- (2) たとえば、『朝日新聞』二〇二二年六月九日朝刊など。
- (3) 田辺聖子『田辺聖子 十八歳の日の記録』(文藝春秋、二〇二一年二月)。
- (4) 梯久美子「解説」『十八歳の日の記録』二五六―二五八ページ。
- (5) 既に樟蔭女専時代に田辺氏が執筆した習作「十七のころ」に關して、田辺氏の日記に基づいた分析が中周子氏によってなされている(中周子「田辺聖子『十七のころ』追考―樟蔭女

子専門学校時代の『日記』による―)『樟蔭国文学』第五八号、二〇二二年)。

- (6) 拙稿「教務日誌に見る昭和19年度の樟蔭女子専門学校」(大阪樟蔭女子大学研究紀要』第二巻、二〇二二年、以下「拙稿二〇二二」と略記する)。

- (7) 『十八歳の日の記録』との対照の便を図るため、以下、日付に關しては、基本年号表記とする。

- (8) 『十八歳の日の記録』昭和二〇年五月十四日条からは、郡是塚口工場における勤労働員から樟蔭女専生徒の引き上げが急遽決まったことが判る。さらに『十八歳の日の記録』同年五月二十一日条から、同月十九日から学校へ復帰したことも判る。

- (9) 昭和二一年度から樟蔭女専で漢文を担当している。拙稿「樟蔭女子専門学校国文科『国語』試験問題の翻刻と紹介(2)」(『樟蔭国文学』第五〇号、二〇二三年、以下、「拙稿二〇二三」と略記する)における、昭和二一年度以降の漢文関係科目試験問題担当者を参照されたい。

- (10) 『十八歳の日の記録』昭和二二年十二月二十三日条。この日の記事によれば、この講習時に田辺氏は、関矢先生の講義と本城先生の「夢、現実、象徴、フランス文学史」の講義とががちあっており、本城先生の講義が聞きかかったにもかかわらず、あえて関矢先生の講義を選択していたことが知られる。なお、この冬季講習は、十二月十六日から二十一日までの六日間開講され、学期中の講義とは別であったことから、講習

料として別に十円を支払っていたことが知られる。当時の樟蔭女専における講義の実施の仕方を知る上で興味深い記述となっている。

- (11) 『十八歳の日の記録』昭和二年八月十六日条に「たしかに漢文の点はつけ間違いであろう。無念とも何とも言いようがない。」と記されており、おそらくは漢文の成績に変更は無かったものと推測される。

- (12) 前掲注(11)に引用した文章の直前には、「今度の学期こそ、私はうんと頑張って、大館さんを追い越すべきだ。」と記されており、より成績の席次をあげることを田辺氏が意識していたことが知られる。

- (13) 『十八歳の日の記録』昭和二〇年四月二十日条には、「一難去ってまた一難、ようやく『エスガイの子』が脱稿したと思ったら、画が描きたくなくなって、勉強も手につかずというかたち。」と記されており、「エスガイの子」が書き上げられていたことが判る。

- (14) 『十八歳の日の記録』一七四～一七六ページ。

- (15) 『十八歳の日の記録』昭和二年四月二十八日条参照。

- (16) 『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ社、二〇〇九年(ポプラ文庫)には、「私はどういいうつもりか、蒙古がとても好きになった。(以下省略)」(一一〇ページ)という記述があり、この時期の田辺氏の中国の歴史や中国大陸への関心を確認できる。また同様の記述が、『楽天少女通ります 私履歴書』

(角川春樹事務所、二〇〇一年(ハルキ文庫)にもある(六二ページ)。

- (17) 『十八歳の日の記録』昭和二年二月二十日条。

- (18) 『十八歳の日の記録』昭和二年二月六日条。

- (19) この「浩然の気」のエピソード以外にも、『十八歳の日の記録』昭和二年五月二日条には、陶淵明の詩の一節を引用して、若き自身の生き方について思考を巡らせていることが知られる記述もある。

- (20) この「更科日記について」の内容をここで紹介することはできないが、今後全文の公開を期待したい。

- (21) 拙稿「昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科―昭和三年の『教授要目』と『検定ニ関スル試験問題集』から―」(『樟蔭国文学』第四五号、二〇〇八年)三〇～三一ページ参照。

- (22) 『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ文庫)の中には、「更級少女」という項目が立てられており、田辺氏が『更級日記』に興味・関心を抱くにいたった経緯が述べられている。

- (23) 後述するように、田辺氏が一年次在学中に執筆した「上古の女性」と題する論文が大阪大空襲によって焼失したことを想起するならば、これはまさに「幸運」と感じられる。

- (24) 拙稿「十五年戦争期の女子専門学校国語試験問題」(『大阪樟蔭女子大学論集』第四六号、二〇〇九年、以下「拙稿二〇〇九」と略記する)収載の「表 検定試験問題(国文科)一覽」参照。

(25) 拙稿二〇一二参照。

(26) この「文学史雑記」の部分には、「藤澤恒夫」の名も見える。

『十八歳の日の記録』昭和二年一月二十八日条には、田辺氏が、安田章生先生に連れられて友人二人とともに四人で、樟蔭女専での座談会への出席依頼のために藤澤氏宅を訪問しており、その折りの藤澤氏に対する印象が記されている。ただ、「漢詩集ノート」を書いている時点では、当然、そうした後日譚を予想するべくもなかったであろう。

(27) 拙稿二〇〇九参照。

(28) 一九〇〇（明治三三）年～一九七七（昭和五二）年。歌人で国文学者。「白路」主宰。二松学舎大学名誉教授。

(29) 『日本の教養 むらさき』第七卷第十一号二六～三一ページ。

(30) 実際の森本氏の論文と比較してみると、若干の中略があり、また、終盤（森本論文三〇ページ上段二三行目以降）が確認できない。

(31) 「歴史」担当の千葉政清先生。拙稿二〇一三における、昭和二一年度「日本史」「世界史」試験問題担当者参照。

(32) 『十八歳の日の記録』昭和二〇年六月五日条に、「そうだ、私は『秀』の論文『上古の女性』と、立派なノート及び女学校卒業の時、先生や友達に書いてもらった、帳面を失ってしまっただ。」と記されている。

(33) 漢詩集ノート二四ページには、森本論文とは無関係な、「吉野朝」、すなわち南北朝期の『増鏡』や『徒然草』『筑波（菟玖

波）集』『新葉和歌集』などについてのノートとなっている。

(34) 今回は全体的な傾向のみ確認するにとどめ、取り上げられている漢詩それぞれについては触れない。また改めて検討する機会を持てればと思う。

(35) 大江先生は、一九四四（昭和一九）年七月に『本邦儒学史論攷』（全國書房）を上梓し、わが国における儒学の歴史について論じている。そしてその後半部において、伊藤仁斎・東涯や護國学派の儒学者ら江戸時代の儒学者を取り上げている。その関連で、講義の中では彼らの作った漢詩を取り上げたとも推測される。

(36) この部分の最終盤に「何を見ても笑ひたくなるのは、青春時代であり、女性であり、平和である。我国の平安時代の文学は全く若さと女性的性情と、平和をかねそなへてゐたといへる。」といった記述があり、「女性であり」「平和である」といった表現からすると、敗戦後になって記された可能性が高いように推測する。その意味では、より②の可能性が高いように現時点では推定する。

(37) 大江先生の著書奥付に見える略歴などによれば、大江先生は、松山高高等学校の教授をつとめ、一九四四（昭和一九）年には、大阪懐徳堂儒学講授でもあり、わが国における漢学史の専門家であったことが知られる。

(38) 樟蔭女専卒業アルバムによれば、一九三六（昭和一一）年三月卒業生の卒業アルバムから大江先生の顔写真が掲載され、

樟蔭女専の中等教員無試験検定に関わる『検定ニ関スル試験問題集』（樟蔭学園蔵）におけるの「漢文」の試験問題が一九四五（昭和二〇）年度まで大江先生により出題されている（拙稿二〇〇九・二〇一二参照）ことから推定される。

(39) 大江先生は、その著書の序文を漢文で記している例（『程哲学史論』東洋大学出版部、一九一一年など）もあり、その影響を考えることもできるかもしれない。

(40) 『十八歳の日の記録』一八八～二五〇ページ。

(41) 大江先生の他に、登場人物のモデルとされているのは、「物化のK教授」とされるのは物理化学科の河西先生、「風流ですべてに通じている、硬いがまた優しいK教授」とは田辺氏の担任勝俣億朗先生、「識見も高く教養もあり、真心から生徒をみちびかれる校長」とは、言うまでも無く樟蔭女専校長の伊賀駒吉郎先生、そして、「若くて理想家で清らかで真摯なT教授」は歴史学担当の千葉政清先生と推定できる。

(42) 『十八歳の日の記録』昭和二〇年八月十七日・三十日、九月四日条など参照。

(43) 『十八歳の日の記録』昭和二年三月四日条。

(44) 例えば、「無題」の中で法隆寺を見学する様子が描かれているが（『十八歳の日の記録』二二四～二二三ページ）、実際に田辺氏ら国語科一年生は、昭和一九年五月十五日に法隆寺見学に出かけており（拙稿二〇一二参照）、この時の状況が小説に活かされたであろうことも推測される。

〔追記〕

本稿で言及した田辺氏のノート「日本著名漢詩集 文學史研究論文（附）その一」の閲覧、使用については、田辺聖子文学館学芸員の住友元美氏にお手数をおかけし、たいへんお世話になった。最後に記して、お礼申し上げます。